

動詞目的語としての「ソレ」に関する一考察

—中国語との対応をめぐって—

A Study of “Sore” as a Verb Object: Concerning Chinese Equivalents

单 艾婷

SHAN Aiting

提要 本文从学习者的误用例出发, 着眼于作为动词宾语的「ソレ」, 对其与汉语的对应方法进行了分析和考察。分析结果表明: 作为动词宾语的「ソレ」对应汉语的方式是省略宾语或者将其对应的内容具体化。同时, 本文通过对「ソレ」和“那个”的本质区别进行考察, 得出了以下结论: 日文的「ソレ」是具有可变解释的非指示性的“实指”, 而中文的“那个”是不具有可变解释的指示性的“虚指”。

キーワード: 動詞目的語、ソレ、モノ照応、コトバ照応、行為照応

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 分析資料及び方法
4. まとめと考察
5. おわりに

1. はじめに

日本人中国語学習者の作文には、次のような誤用がしばしば観察される。

- (1) *三連休的第一天, 我在家待了一天。我感觉夏天的疲劳消除了。第二天我整理了冰箱里的东西。我想在夏天之前做那个, 但是没能做到。

三連休最初の日、私は一日家で過ごしました。夏の疲れが取れたようです。次の日私は冷蔵庫の整理をしました。私はそれを夏前にしたかったのですが、できませんでした¹⁾。

- (2) *上周去了美发厅, 剪了10厘米左右的头发。我变得喜欢洗头和吹风机了。第二天

我想要新吹风机，就买了那个。

先週美容室に行って、髪の毛を10センチぐらいカットしました。シャンプーとドライヤーが楽になりました。次の日新しいドライヤーが欲しくなって、それを買いました。

(1) (2) では、日本語は指示表現「ソレ」を用いて前文の先行詞と照応し、それぞれ「冷蔵庫の整理」「新しいドライヤー」を指し示す。しかし、この「ソレ」を中国語にするとき、“那个”に置き換えるのは不自然である。現場指示の場合、例えば、買い物をしている人が自分（行為者主体）から遠い場所にあるものを指して「それをください」という場合、“我要那个”と言うことができる。しかし、(1) (2) のような文脈指示の場合、「ソレ」= “那个” とならないのはなぜだろうか。本稿では、文脈指示における「ソレ」に焦点をあて、中国語と日本語の対応関係について検討を加える。特に、上記例のような齟齬が生じる原因を明らかにし、得られた示唆を学習者の指導法に還元することを目指す。

2. 先行研究

日本語の指示表現、中国語の指示表現、また日中両言語の指示表現の対照研究は、これまで数多くなされてきた。秦礼君 (1995) は、日本語の指示代名詞は動詞目的語として用いられることが多いのに対し、中国語にはそのような用いられ方は少ないと指摘しているが、その理由については言及していない。一方、木村英樹 (2012) は、中国語の“这/那”は動詞文の主語や目的語の位置に立っていないという点で「コレ/ソレ/アレ」とは異なると指摘する。例えば (3) (4) の例である。

(3) *这倒了。[これが倒れた。] (木村英樹 2012 : 17 (4))

(4) *我想用那。[私はあれを使いたい。] (木村英樹 2012 : 17 (5))

この例文の“这/那”を“这个/那个”に置き換えた (5) (6) は、自然な表現となる。

(5) 这个倒了。[これが倒れた。]

(6) 我想用那个。[私はあれを使いたい。]

“这/那”は動詞文の主語や目的語になれないのに対し、“这个/那个”は可能である。であれば、“这个/那个”は日本語の「コレ/ソレ/アレ」と異なるとは言い切れないのではないだろうか。これらの先行研究からは、冒頭に挙げた日本人学習者による“那个”の誤用は、文法上の制約によるものではなく、意味機能の制約によるものではないかと予想される。ただし、(5) (6) はいずれも現場指示の例であり、問題となっている文脈指示の例ではない。そこで、本稿では特に文脈指示に限定し、日本語の「ソレ」を中国語に訳す場合どのように対応するのが妥当であるかを検討する。

3. 分析資料及び方法

本稿は、主に《日本童话故事精华选》（日本童話名作選）と《日本短篇小说精华选》（日本短篇小说名作選）より用例を収集した。

分析は次の3ステップを踏む。まず、日本語の「ソレ」のうち動詞目的語としての用例を収集する。王亜新（2004）は文脈指示の典型が先行文に現れた対象を照応させる「文脈承前」の用法であり、それをさらに「モノ照応」と「行為照応」に分けることができると述べている。本稿は王亜新（2004）で言及された「モノ照応」「行為照応」、そして本分析資料から観察された「コトバ照応」を加えた3つに分類し、それぞれに対応する中国語はどのような表現であるかを観察するとともに、そのような表現となる理由についても考察する。最後に、学習者の誤用の原因を明らかにし、得られた示唆をもとに指導法の提案を行う。

4. 分析

本節では、i 「モノ照応」、ii 「コトバ照応」、iii 「行為照応」の具体例を観察する。

4.1 「モノ照応」

「モノ照応」はさらに特定のモノと不特定のモノに分かれる。まず、「ソレ」が指し示す先行詞が特定できるモノである場合の用例を見てみよう。

- (7) 男の子は、山へ行ってたきぎをあつめ、それを村の酒屋へもって行っては、お酒ととりかえてもらいました。(酒の泉)

男孩去山里捡柴，再把柴送到村里的酒馆给爸爸换酒喝。

- (8) ちょっと離れたところに、踏みつけられた戦闘帽が目についたので、拾って見ると、僕の帽子によく似ているが僕のではない。まあ良いわいと、それを被って高橋夫人と一緒に構外に出た。(黒い雨、王亜新2004:85(2))

我看见在不远的地方，有一顶被人踩过的战斗帽，捡起来一看，很象我的，但不是我那一顶。这也行啊，我把它戴上，和高桥夫人一起走出了车站。

(7)(8)は、「ソレ」を用いて、それぞれ先行詞「たきぎ」と「踏みつけられた戦闘帽」を指し示す。中国語訳では、(7)では“柴”(たきぎ)と先行詞そのものが繰り返され、(8)では第三人称モノ代名詞“它”が使われている。この2例は、ともに処置文(“把”構文)が使われている。処置文では目的語が必須でかつ特定であるという構文制約があるため、中国語訳では先行詞そのものを反復するか、第三人称モノ代名詞“它”を用いるという2つの対応法が見られる。一方、(9)の例はどうか。

- (9) 家へ走り帰るとすぐ吉は、鏡台の抽出から油紙に包んだ剃刀を取り出して人目につかない小屋の中でそれを研いだ。(笑われた子)

刚一跑回家，阿吉便立刻从梳妆台的抽屉里拿出了用油纸包着的剃刀，然后到一间不

起眼的小屋里磨了起来。

処置文を使わない場合、「ソレ」にあたる言葉は見られない。すなわち、中国語に翻訳するとき、「ソレ」は省略されることになる。これは、省略しても文脈上指示関係が明らかなためである。動詞(研ぐ)の目的語がなくても文脈から剃刀(カミソリ)であることは特定できる。日本語では、指示表現「ソレ」によって文間または節間のつながりが保証されるのに対し、中国語では「先行詞の反復」、「第三人称モノ代名詞“它”」、「省略」といった手段によってその結束性を表現する。

次に、「ソレ」を指し示す先行詞が不特定である場合の用例を見てみよう。

(10) 私も直ちに言葉を習いはじめ、もうかなりの単語を頭に入れ、それを書くこともできます。(マッテオ・リッチ伝、王亜新2004:85(4))

我立刻开始学习汉语，已经记住了不少单词，也会写它了。

(10)の「ソレ」は、前節の「かなりの単語」と照応している。「かなりの単語」は不特定であるため、中国語では翻訳されていない。

4.2 「コトバ照応」

(11) じいさんは、「そうだな、山のおおかみもおっかないが。」という、声をひそめて、「ほれ、こんな古い家じゃ。雨がふれば、すぐ雨もりがする。古屋のもりが、いちばんおっかないわい。」と、こたえました。ばあさんはそれをきくと、大きな声で、「そうじゃ、ふるやのもりが、いちばんおっかないねえ。そろそろやってくることだ。」(ふるやのもり)

老爷爷低声又说：“我们这个破房子，一下雨就会漏雨。我觉得漏雨老宅是最令人害怕的。”老奶奶听了老爷爷的话，大声说道：“对哦！漏雨老宅最可怕。眼看它就要来了呢。”

(11)は「ふるやのもり」という童話の一節で、じいさんとばあさんは世界で一番おっかないものは何かについて話している。ここの「ソレ」は、じいさんの「ほれ、こんな古い家じゃ。雨がふれば、すぐ雨もりがする。古屋のもりが、いちばんおっかないわい。」というセリフを指す。中国語では、「ソレ」は具体的に“老爷爷的话”(じいさんの話)と訳されている。似たようなコトバを指す「ソレ」の用例はいくつか見られるが、いずれも“听了这话”(この話を聞いて)、“听到这里”(ここまで聞いて)などと翻訳されている。つまり、コトバを指し示す場合の「ソレ」は、ラベル貼り²⁾の“这话”(この話)や、そのコトバを発した人物に言及する“~的话”(~の話)、聞いた時点に言及する“听到这里”(ここまで聞いて)といった形で対応される。ただし、翻訳されない場合もある。

(12) 「お日さま、お日さま。いま、もぐらのやつが、あなたを弓矢で射おとしてやる

といって、高い木にのぼっていきました。ご用心ください。」お日さまは、それをきくと、「もぐらめ、けしからんやつだな。そんなことをするなら、ひとつ、こらしめてやらなくてはならない。きょうから、もぐらは、土の上を歩くことはあいならん。」といって、おこりました。(お日さまを射そこなったもぐら)

“太阳殿下，太阳殿下，鼯鼠那家伙说要用弓箭把您射下来，他已经爬到大树上了。您可要当心啊！”太阳听了，非常气愤，“臭鼯鼠，岂有此理！他这么做，我必须狠狠地教训他一下。从今天开始，不允许他在地上行走。”

これは、お日さまを射落とそうとするもぐらについて、ひきがえるがお日さまに告発する場面である。この「ソレ」は、ひきがえるの告発のセリフを指し示している。中国語では、ただ“太阳听了，非常气愤”（お日さまは聞いて、非常に怒った）と表現するだけで、「ソレ」自体は翻訳されていない。

4.3 「行為照応」

- (13) お姫さまが、八幡さまへあがる坂にさしかかったときでした。とつぜん鬼がでてきて、お姫さまをとって食おうと、大きな口をあけてとびかかってきました。それをみた一寸法師は、すばやく鬼の口の中へとびこみました。(一寸法師)

正当小姐临近八幡宫的上坡路时，一只恶鬼突然现身，张开血盆大口想要吃掉小姐。看到这一情形，一寸法师敏捷地跳入恶鬼地嘴里…

- (14) 「いくらいいお酒でも、いちどにたくさんのは体によくない。」男の子はそう考えたので、ひょうたんに一杯、その晩にのむぶんだけくみました。それを、何年も何年もつづけました。父さんは、男の子が酒の泉からくんでくるお酒をたのしみにのんで暮らしていましたが、やがて年をとって死にました。(酒の泉)
“不论多好的酒，一下子喝多了对身体也不好。”男孩想到这儿，就每天只打回一葫芦当晚喝的量。一晃过了很多年，爸爸每天享用着男孩从酒泉打回地酒，慢慢老去，直到离开人世。

(13) は一寸法師の話である。この「ソレ」は、鬼が出てきてお姫さまをとって食おうとしたという出来事を指し示す。中国語では“这一情形”（この状況）と訳されている。(14) は、酒の泉を発見した男の子が父さんのために毎晩お酒をくみに行く話である。この「ソレ」は、前文の「ひょうたん一杯、その晩にのむぶんだけくみました」という男の子の行為を指し示している。中国語は、“一晃过了很多年”（あつという間に数年が経った）と表現され、「ソレ」は訳出されていない。ほかの行為照応の用例を見ても、ほとんどの「ソレ」は訳出されず、“看了”（見た）、“看到后”（見た後）などと対応している。

5. まとめと考察

前節では、動詞目的語としての「ソレ」に照応する先行詞を「モノ照応」、「コトバ照応」、「行為照応」の3つに分けて用例を観察した。その結果は、表1の通りである。

表1 動詞目的語としてのソレと中国語との対応

モノ照応	特定のモノ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先行詞反復 ・ 第三人称モノ代名詞“它” ・ 省略
	不特定のモノ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 省略
コトバ照応		<ul style="list-style-type: none"> ・ ラベル貼り：“这话”（この話）、“~的话”（~の話） ・ 聞いた時点での言及：“听到这里”（ここまで聞いて） “听了以后”（聞いた後） ・ 省略：“听了”（聞いて~）
行為照応		<ul style="list-style-type: none"> ・ ラベル貼り：“这一情形”（この状況） ・ 見た時点での言及：“看到后”（見た後） ・ 省略：“看了”（見て~）

「モノ照応」は、さらに「特定のモノ照応」と「不特定のモノ照応」に分かれる。先行詞を表すモノが特定できる場合、中国語では、「先行詞反復」、「第三人称モノ代名詞“它”」、「省略」という3つの対応が見られた。一方、先行詞を表すモノが不特定の場合、「ソレ」は翻訳されないのが一般的なようである。「コトバ照応」の「ソレ」は、中国語の対応法として、「ラベル貼り」や「聞いた時点での言及」、「省略」が挙げられる。「行為照応」は、「コトバ照応」と似たような対応法が観察される。すなわち、「ラベル貼り」や「見た時点での言及」、「省略」などの手法である。以下では、なぜこのような対応法になっているのか、また、「ソレ」と“那个”の根本的な違いとは何か、について考察する。まず、「ソレ」の「ソ」の持つ曖昧性に注目する必要がある。

金水敏・田窪行則（1990）は次の例を挙げている。

(15) これ、ついそこの菓子屋で買ってきたんだけど、食べる？

（金水敏・田窪行則 1990：138（44）、下線は筆者）

(16) 「おでかけですか」

「ええ、ちょっとそこまで」（金水敏・田窪行則 1990：138（45）、同上）

金水敏・田窪行則によると、(15) (16) の「ソ」は、遠くも近くもない場所を指し示すというニュアンスを持っている。通常、話し手・聞き手がともに知っている要素を指し示す時に「ソ」が用いられるが、(15) (16) のような聞き手との要素の共有が考えにくい場合もあることから、「ソ」が曖昧な用途でも使用可能であることがわかる。そして、このような曖昧さの許容が、日本人中国語学習者の作文で (17) のような誤用を生む。

(17) *四月日本的到处开樱花。那儿我看到很多中国人。

最近は、たくさんの中国人が日本に訪れます。四月は至るところに桜が咲きます。
そこでも中国人を見かけます。

(18) 最近のアイドル歌手はそのへんにいる女の子と変わらない。

(金水敏・田窪行則 1990 : 138 (46)、下線は筆者)

(17) の「そこ」とは何を指し示すのか、「至るところ」とはどこなのか、いずれも曖昧である。(18) も、「そのへん」には具体的なイメージがない。金水敏・田窪行則はこれらの曖昧な用法を「中称」と呼び、「コ」や「ソ」のすきまを埋める表現として機能すると指摘する。ただし、その背景・要因については言及していない。

この問題を解決するために、Neale, Stephen (1990) の示す *object dependent/ object independent* という概念と、堤良一 (2012) の示す「ソノ」の変項原理を援用して考察したい。Neale, Stephen (1990) は、すべての自然言語の名詞句は「指示表現」か「量化表現」かのいずれかであると指摘する。例えば、英語の固有名詞、指示詞、一部の代名詞は「指示表現」で、そのほかの名詞句は「量化表現」であるとする。両者の区別は、それらの名詞が *object dependent* (指示表現) であるか、*object independent* (量化表現) であるかということである。堤良一 (2012) は、Neale, Stephen (1990) の *object dependent/ object independent* の概念を用いて、日本語の指示詞を伴った名詞句について分析している。堤良一によると、指示詞「コ/ア」を伴った名詞句は *object dependent* であり、「ソ」を伴った名詞句は *object independent* であるという。例として、(19) (20) を見てみよう。

(19) 私は今日この公園で、この前の陸上記録会の優勝者に会うことになっている。その
の/*この優勝者はここまで車で来るそうだ。(堤良一 2012 : 39 (22b)、一部修正)

(20) 私は今日この公園で、今年の琵琶湖マラソンの優勝者と会うことになっている。
その/この優勝者はここまで走ってくるそうだ。

(堤良一 2012 : 39 (22d)、一部修正)

(19) では「コノ」が使えないのに対し、(20) では「コノ」が使える。堤良一によれば、(19) は文脈から「優勝者」が複数いてその中の誰か (x) が来るのに対し、(20) は通常「マラソンの優勝者」は 1 人であるため、「優勝者」は唯一的となり、「コノ」「ソノ」両者とも使える。簡略化すれば、以下 (21) (22) のようになる。

(21) その優勝者 (x) → 非指示的 {x/A} (堤良一 2012 : 39 (22e)、一部修正)³

(22) その/この優勝者 → 直接指示 (「この優勝者」 = A)

(堤良一 2012 : 39 (22f)、一部修正)

そして、「コノ/ソノ」の機能を次の (23) (24) のようにまとめている。

(23) 「ソノ」の機能: ソノをともなった名詞句は、意味解釈において変項 (x, y, z...) として解釈される。

(24) 「コノ」の機能：コノをともなった名詞句は「話者にとって指示的」である。

堤良一は「コノ/ソノ」のみについて述べているが、これはコ系統とソ系統全般に見られる特徴と言える。ソ系統は変項として意味解釈ができるため、客観性・中立性 (x=1、直示的) がある一方、曖昧性 (x、y、z...、非直示的) の特徴も見られる。そのため、本稿で取り上げた「モノ照応」に関して、先行詞が特定か否かにかかわらず、「ソレ」を用いることが可能となる。

では、中国語の“那个”はどうだろうか。結論を言えば、「ソレ」は変項解釈を持つ非指示的であり、「実」(content) であるのに対し、“那个”は変項解釈を持たず指示的であり、「虚」(function) である。中国語では文脈指示では通常“这”(コ系統) が用いられ、“那个”は少ない(王亜新2004など)。そして、具体的な名詞とともに使われる。例えば、(25)は自然であるのに対し、(26)は不自然となる。

(25) 昨天看了新上映的电影。那个电影很不错。(作例)

昨日公開の映画を見た。その映画はとてもよかった。

(26) 昨天看了新上映的电影。*那个很不错。(作例)

昨日公開の映画を見た。それはとてもよかった。

日本語は「ソレ」のみでも実質的な内容を指示することができるのに対し、中国語の“那个”は実質的な内容を指示することができない。そのため、“那个”+名詞という形で使われる。では、なぜ“那个”は文脈指示において実質的な内容を指示することができないのか、それは“那个”自身の「虚」と関係しているように思われる。木村英樹(2012)は、前述の(4)(5)において、中国語の“这/那”は動詞文の主語や目的語の位置に立てないという点で「コレ/ソレ/アレ」とは異なることを指摘した。

(27) *这倒了。[これが倒れた。] (木村英樹2012:17 (4) 再掲)

(28) *我想用那。[私はあれを使いたい。] (木村英樹2012:17 (5) 再掲)

従来、“这/那”はそれ自身の範疇概念として<事物>(=コト・モノ)の意味を担うものとされてきたが、木村英樹は、(27)(28)に見られる“这/那”のような振る舞いは従来の考え方だと理解しにくいと指摘し、むしろそれ自身何らの範疇概念も担わず専ら指示概念のみを担う語だと主張する。つまり、方向を支持するための矢印のように、対象(事物)のありかを知らせるべくそれを「指し示す」だけの役割を担うものであって、それ自身が指し示された先の対象(事物)を「表し示す」ものではないと定義する。そのため、“这/那”の意味するところは実体性に乏しく、名詞に相当する文法機能を欠いており、虚詞(機能語・function word)的に捉えるべきだとしている。一方、“这个/那个”という形式は、“这/那”と量詞“个”

(個)の直結した形である。(27)(28)の“这/那”を“这个/那个”に置き換えると、(29)(30)はいずれも自然な表現となる。このことから、木村英樹は、“这/那”とは対照的に“这个/那个”はより実体的で名詞相当の機能を具えており、日本語の「コレ/ソレ/アレ」により対応すると述べている。

(29) 这个倒了。[これが倒れた。] ((5)再掲)

(30) 我想用那个。[私はあれを使いたい。] ((6)再掲)

木村英樹の指摘する通り、“这个/那个”は“这/那”より指示対象を特定できるニュアンスが強まる。それは、“这个/那个”の量詞“个”(個)の後には通常名詞が来るものであり、その名詞が省略されていても理解(特定)できるためである。現場指示の場合、目の前にそのモノがあるため強いて言及する必要がない。しかし、文脈指示の場合、前述の通り、“这个/那个”のみで「ソレ」に対応することはできず、より具体的に指示する必要があった。すなわち、文脈指示においては、“这个/那个”もまた「虚」であると言える。そのため、「ソレ」を中国語に訳す際に、具体的に対応させる必要が生じる。なお、省略も可能であったが、これはその談話を保つ結束性のメカニズムが異なるためである。このことについては、別稿に論を譲りたい。以上の考察から、本稿の主張を以下のようにまとめる。

- ・ 日本語の「ソレ」は変項解釈を持つ非指示的であり、「実 (content)」である。
- ・ 中国語の“那个”は変項解釈を持たず指示的であり、「虚 (function)」である。

6. おわりに

ここで、冒頭に提示した学習者の誤用例を修正する。

- (1) *三连休的第一天，我在家待了一天。我感觉夏天的疲劳消除了。第二天我整理了冰箱里的东西。我想在夏天之前做那个，但是没能做到。

修正案1：我本想在夏天之前整理的（私は夏前に整理したかったのですが…）

修正案2：我本想在夏天之前整理冰箱的（私は夏前に冷蔵庫を整理したかったのですが…）

- (2) *上周去了美发厅，剪了10厘米左右的头发。我变得喜欢洗头 and 吹风机了。第二天我想要新吹风机，就买了那个。

修正案1：第二天我想要新的吹风机，就买了。

（次の日新しいドライヤーが欲しくなって、買った。）

修正案2：第二天我想要新的吹风机，就买了一个。

（次の日新しいドライヤーが欲しくなって、1つ買った。）

本稿は、学習者の誤用例を出発点として、動詞目的語としての「ソレ」に着目し、その中国語の対応方法について分析・考察を行った。分析結果から、「ソレ」を中国語に翻訳する場

合、目的語を省略するか具体的に言及するかといった対応法が明らかになった。また、「ソレ」と“那个”の本質について考察を行った。「ソレ」は変項解釈を持つ非指示的で「実 (content)」であるのに対し、中国語の“那个”は変項解釈を持たず指示的で「虚 (function)」であるという結論に至った。なお、この結論は文脈指示に限るものであることを断っておきたい。今後は、より多くの用例を収集し、日中両言語における指示詞全般の対応例について分析していく。

注

- 1) 日本語訳は日本人学習者によるものである。
- 2) 「ラベル貼り」は、庵功雄 (2019) の用語による。先行する発話や文連続を指示しそれらに名付けをする (ラベルを貼る) 用法である。
- 3) 堤良一 (2012:35) は、「指示的/非指示的」の定義を次のように示している。「ある名詞句 (a) が世界の対象物を直接指示するとき、その名詞句を指示的であると言い、意味解釈において変項を導入するとき、その名詞句を非指示的であると言う」。

参考文献

- 庵功雄 (2019) 『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房。
- 王亜新 (2004) 「文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違—日文中訳作品の実例分析」『言語と文化』4、東洋大学言語文化研究所：83-98。
- 木村英樹 (2012) 『中国語文法の意味とかたち—「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究—』白帝社。
- 金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」金水敏・田窪行則 (編) (1992) 『指示詞』、ひつじ書房：123-149。
- 堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版。
- 秦礼君 (1995) 《汉日语指示词的语法差别》《外语研究》3、南京国际关系学院：29-31。
- Neale, Stephen. 1990. *Descriptions*. MIT Press.